近世浄土宗本堂の研究（その2）

岡　野　　清

STUDY OF THE MAIN HALL IN JYODO SECT IN EDO PERIOD (PART Ⅱ)

隣　松　寺　本　堂

創立と沿革

この寺の創立は平安初期に溯り，隣松院殿は淳和天皇第3皇子で，その開基であるという。初めは天台宗で仁治元年（1240）浄土宗に転じたという。しかしその後明徳年間に蓮蔵忠阿が住職して始めて改宗の実を挙げたので，師を当寺の開山とする。隣松寺が三河松平家と関係を深くしたのは，永禄6年三河一向一揆のとき，家康がこの寺に一時避難した際，寺が忠勤を励んだためで，翌7年（1564）には家康が本堂の修理を行なったと言う。寺記に「永禄七年三月既成就ノ為，稲荷社及本堂ノ修繕ヲ行ハセラル（家康）」とある。然し，「寛文七年（1667）当寺焼失之砌御殿も類焼仕候」（当時古記録之写）とあり，寺伝によれば地侍が境内殺生禁断を犯した件に関するもつれから，不審火を発したという。再建については，寺に残る寛永7年の棟札に

大圓覚海浄伽藍　無始無終無却灾　寛文七丁未暦
三月　日

佛閣殿　　當山廿二世湛譽上人

法嗣連環億千歳　降竜伏虎化方来　奉起立之敬白

とあり仏閣殿とは本堂のことと思う。

もう一枚の棟札は

尾岳知多郡

一立古今然不動不變　京　　宝永三戌暦

岩谷村大工

鈴木傳三郎

鈴木庄衛門

とあり，内陣後方への拡張のときの棟札かも知れないが本堂の棟札である確證がない(写真1)。近年に至り，矢作川が氾濫して寺域が脅かされたことを憂いて，大正12年～3年壇徒総力して本堂全体に2m程地上げを行っているので，現在は旧態より著しく高くなっている。

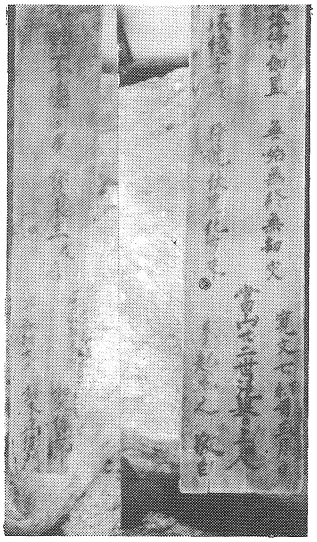

写真1　本堂建立の棟札

本堂は桁行9間（実長9間半）梁間5間（実長7間），寄棟造，桟瓦葺に桁行3間梁間3間（実長3間半）の角屋を後方に出し，前面に向拝を設けて南面する。軒は2軒繁垂木。主屋の正側三面に巾一間の広縁を廻らし，入側内の前方3間を外陣とし，後方中央巾3間半，奥行は角屋に及ぶ5間半を内陣とし，その後端半間を3分して，中央に広く位牌壇をとり，両脇を脇仏壇とする。その前面から一間前に来迎柱を立て，後方に張出を作って仏壇を安置し，前面に禅宗様の須弥壇をおく。また内陣両脇の各間口2間，奥行三間の前半を脇の間とし，後半の奥に仏壇を設け，その前を仏壇の間とする(図1)。

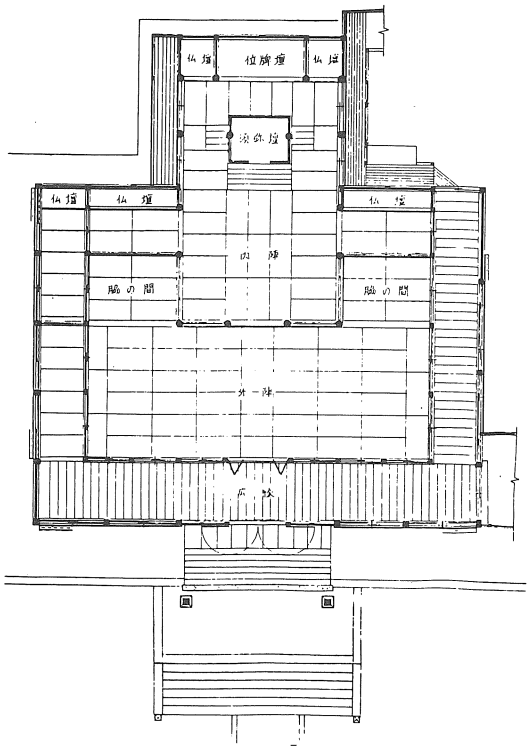

図1　隣松寺本堂現状平面図

向拝は後補であるが間口3間分で型の如く，石製礎盤の上に几張面取上下粽つきの角柱を立て，柱間に虹梁を渡し，丸彫彫刻の木鼻を出し，出三斗斗栱を配して（手挟なし）桁を支える（写真2）。

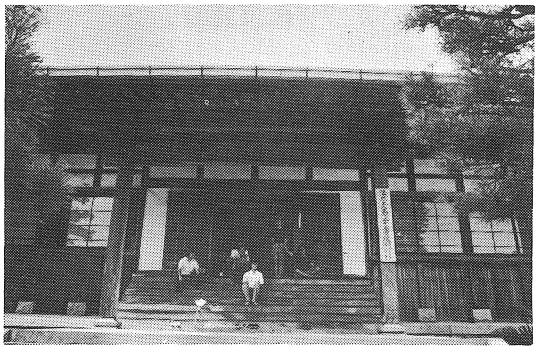

写真2　向　　拝

この堂で仏堂風に扱っているのは内陣まわりのみで，その他は邸宅風に扱われ，僅かに前面広縁と外陣境の中央間に虹梁を架して両端を挿肘木で受け，上部を小壁としているのみである（写真3）。外廻りは正面中央間と前面広縁の両妻と東広縁の後端を戸口とする他は中敷居を入れ，腰長押，敷鴨居，内法長押，側桁を通し，内法長押の位置

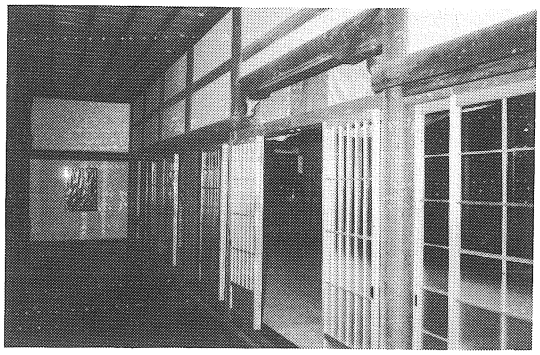

写真3　広縁外陣境の中央間の虹梁

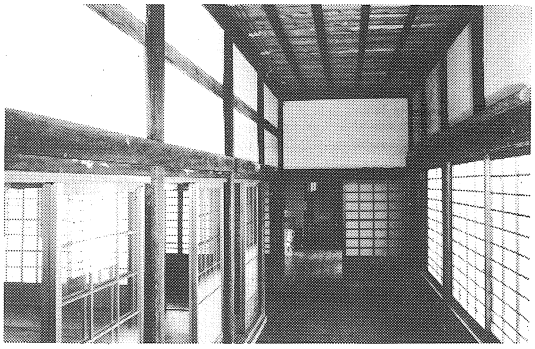

写真4　前面広縁

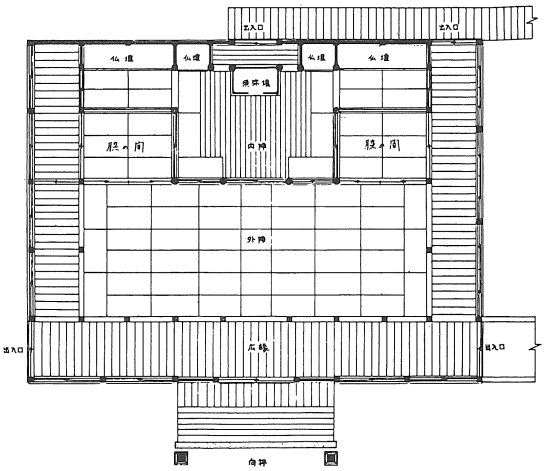

図2　隣松寺本堂復原図

は入側の内法長押より長押背だけ背違いに高くおく。窓は2本溝で先に雨戸を引いていたこともある。現在硝子障子を入れる（写真4参照）。広縁天井は棹縁，入側通りでは半長押，敷鴨居，内法長押，天井長押を通し，外陣脇の間，仏壇間では棹縁天井廻縁との間に蟻壁をつくる。尚南広縁と東西広縁の境にも前面入側通りに続けて

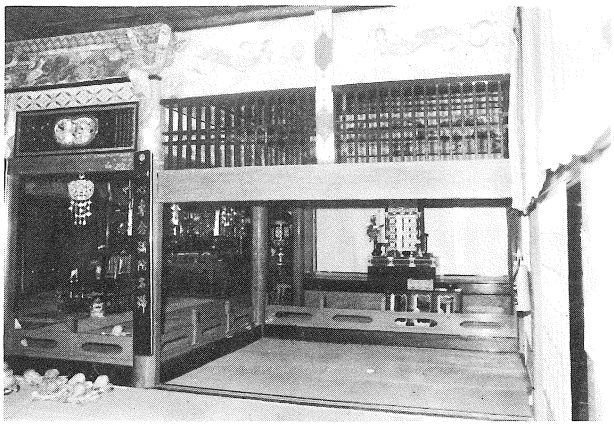

写真5　脇の間と内陣仏壇前

写真7　来迎付近

無目内法長押を通し，上部を小壁とし，西広縁の外陣と脇の間境の筋でも敷鴨居を入れ，内法長押を通して間仕切る。外陣正側面では，現在新らしい敷鴨居を付加し硝子障子を入れているが，元はすべて無目で，戸締りはなかった(写真4)。しかし，脇の間や仏壇の間と広縁の境には敷鴨居が入り，元来障子をはめていたことがわかる(図2)。

この堂で仏堂らしい構えを見せているのは内陣まわりにとゞまるが，内陣前面は中央間を広く取って3分し，側面では前端を脇の間と合わせて一間半の柱間とし，次は仏壇前列となり，角屋部分は2柱間に分け，背面は仏壇部分と区分して，円柱（戸当りに面を取る）で分け，脇の間よりも仏壇前と内陣の床高を框一段高くしている(写真5)，円柱には上部粽をつけ，敷鴨居上に内陣正面では筬欄間（中央に木爪型の枠に彫刻入り）を入れ，側面では小壁とし，柱上には頭貫，台輪をつけ，頭貫端を木鼻とし，側面前端では差鴨居と頭貫間の中央に大瓶束を入れ(写真6)，柱上及び束上並びに正面中央間の中央に出組斗栱（禅宗様式に壁付上方肘木を長く延し挙鼻をつける）をおき，天

写真6　内陣脇の間境の内陣側小壁の大瓶束

写真8　内陣角屋奥の脇仏壇

井は格天井とする。来迎柱は円柱上部粽つきで，側柱上同様頭貫，台輪をのせ，出組斗栱を組み，隅には内陣入隅柱上と同様，斜肘木を出して，菊斗をおく。なお現在は頭貫を上方に唐破風式にまげて来迎柱間の高さを高くして，仏天蓋をおさめている(写真7)。

脇の間の前面では柱間に敷居を入れ，内陣の差鴨居と背違いに低く，背の高い差鴨居を通し，その上に内陣頭

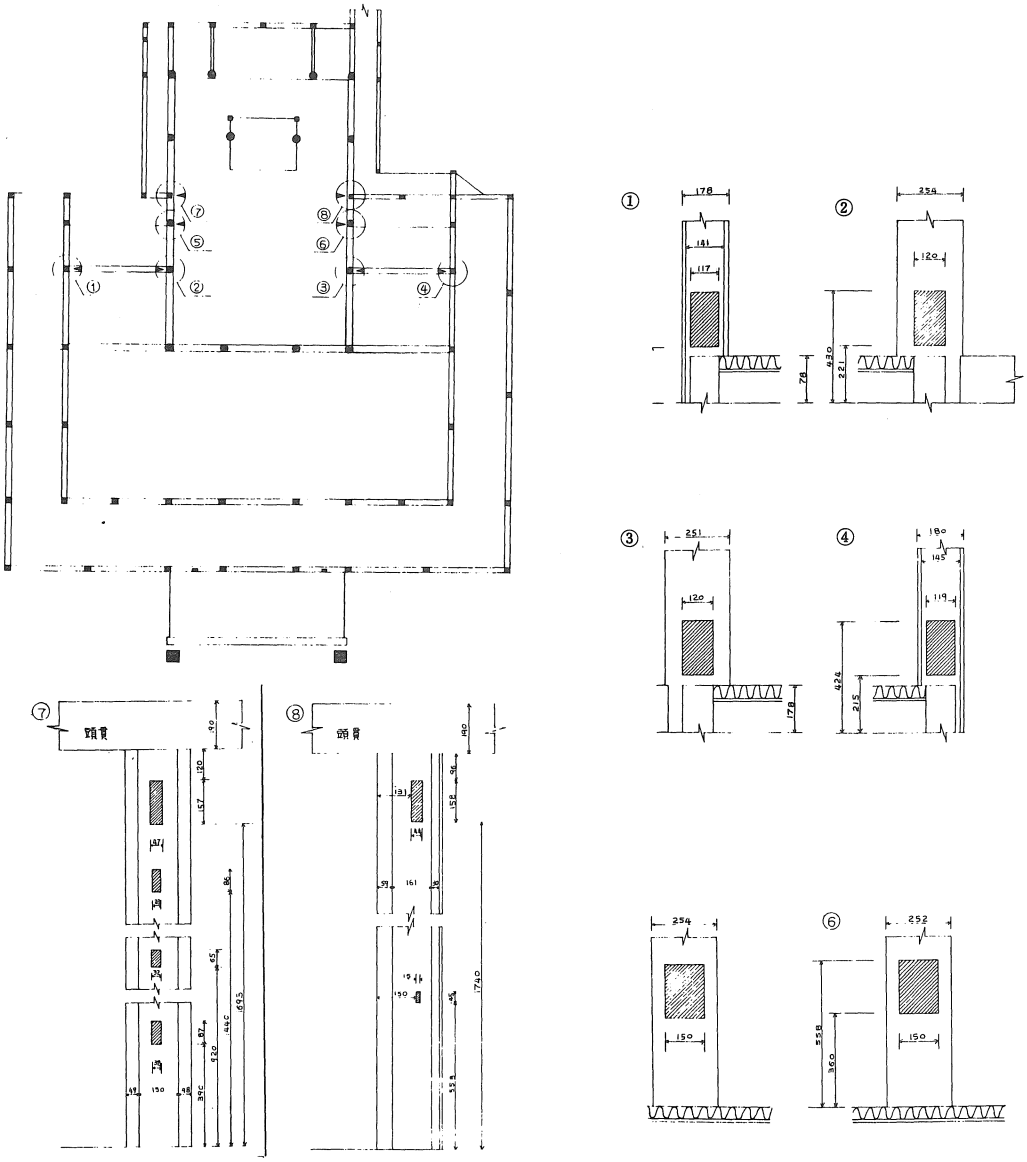

図3　隣松寺本堂復原資料となった痕跡図

貫下に框を通してその間を縦格子欄間とし，中央に束を入れて，天井下までを板小壁とする。奥の仏壇では框下に羽目を入れるのみで，上方には貫を通してその上を小壁とする。仏壇上は棹縁天井。内陣まわりでは，床框，仏壇框，欄間，天井の格子等（以上面は朱入）黒漆塗り，柱及び差鴨居を朱塗りとし，柱上部から小壁（楽器をかく），頭貫，斗栱は極彩色，脇の間前の小壁や束，奥の仏壇上貫，小壁にも彩色を施す(写真８)。

なお脇の間奥佛壇裏や角屋の両側には渡縁を設けているが，何れも後補である。

復原的考察

この堂で材が古く感じられるのは前方部分の柱，長押などで，背面通り及び角屋の材はそれに比して新しく，材も前者が栂であるのに対し，桧を使用しており，内陣まわりの材は塗られていて古さは定め難いが，材も栂材で，挙鼻や木鼻の形から推定される年代は寛文頃と見てよい。桧材は後で取替えられているのであろう。

背面への角屋部分は，内陣の形式を忠実に模してはいるが，柱など外を角柱に見せており，細部の絵様なども詳細に見ると同時に作られたものではなく，材も桧であるのみでなく，床下の構造も簡略で新らしく，柱も礎石から立上らず，床にのっているなど明らかに後補である。但し背面仏壇を３分する隅仏壇の内側の柱は材も栂でそれから外方の頭貫，台輪とこれの柱上斗栱の形式も彩色

も古く見えて，他材と異なるし，仏壇やその上の斗栱も同様である（但しこれらも床に立つ）。　又，内陣の側面前から第3の柱（脇の間奥仏壇の前方内柱）上の台輪や天井は隅留をのこし，斗栱を見ると元隅斗栱を改造した痕跡が明らかであり（大斗から斜肘木の出た部分を埋木する），頭貫が内方に出ていた痕も埋木されており，天井もここからつぎ足されていて，元ここで内陣が終りこの柱に対して現在後方仏壇脇に使用されている材がおかれたことが考えられる。なおこうして相対する柱の内側には脇の間奥仏壇の上框と同じ高さに上框が通っていた筈の個所が彩色されていて輪郭は捉え難いが，打診によって知られる。とすればここに脇仏壇がおかれたことゝなる。当然来迎柱も前へ移る筈であるが，丁度この元の背面柱通りのすぐ前の天井が少なくとも正方形に4間分後につぎ足されており，元この部分が折上げになっていたと見られるので，来迎柱もこの内陣後列に移ると判断される。しかしその場合来迎柱間が現状のまゝでは，脇仏壇内柱の斗栱と斗栱がぶつかってしまうので，来迎柱間の距離がもっと縮まっていたとしなければならない。仏壇も時代が下ると見られるので，内陣拡張と同時にこの改造がなされたと考えられる。

次に脇の間とその奥の仏壇前の間との境の相対する柱には，現床框上に現床框と同大程の框のとりついた根跡があり，ここには結界が作られたことが判るが，この仏壇前の間と広縁との境の敷居は後に上方に持ち上げられていることが下の半長押に残る痕跡からも，また柱に残る元の敷居の枘穴からも明らかで，この床高も脇の間と同じであったことが知られる。また内陣の床高も後に結界の框上端まで持ち上げられていることが床構造からも明瞭であって，元はすべて床高が同一で，内陣との境は一段上った框上に建具が入り，脇の間とその奥の仏壇前との間には更に框下に羽目を入れて一段高くされ，上は開放となっていたことが知られる　（図3.の①②③④図4.又は図2の復原図参照）。

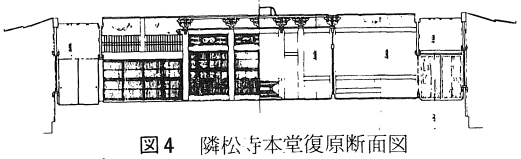

図4　隣松寺本堂復原断面図

結　論

以上のように復原するとこの本堂は随念寺本堂と間取が非常に接近し，桁行長も同一であるが，随念寺の方が内陣が深く，4間あるのに対して隣松寺の方は2間半しかない。そのため随念寺では外陣を内陣両脇で1間入り込ませて，なお脇の間の奥行を2間にしているのに隣松寺の方では前を内陣と揃えてなお1間半にとゞまる。隣松寺の方は奥行の格別浅い例で，内陣でも来迎柱を脇仏壇の前列まで後退させて（そのため脇仏壇の見付巾は著しく挾く，須弥壇の見付巾も相当切りつめられる。），なお須弥壇が　2間にしか達しない状態である。そのため後世内陣の後方への拡張を必要とするに至ったのである。残存数は極く少ない点に問題はあるが，中世の堂と比べると，両堂とも正面外陣が広い。中世の例はいづれもその奥行が2間で，近世初頭にもその例が多いのに，

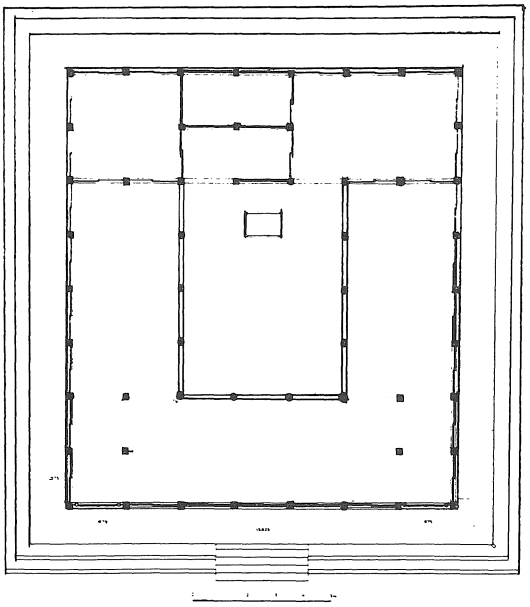

図5　西郷寺本堂復原平面図

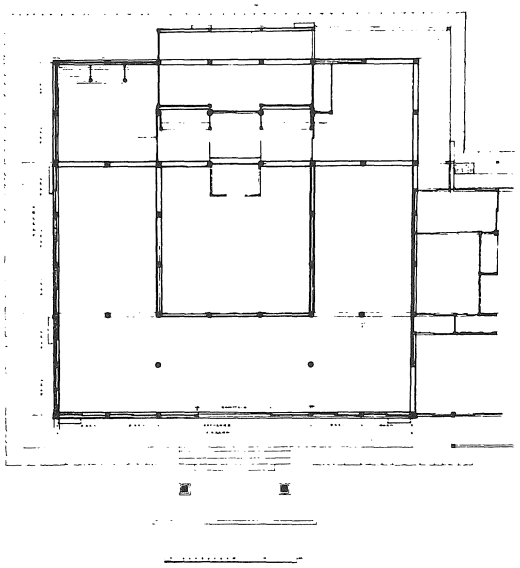

図6　萬福寺本堂復原平面図

両堂では3間をとる。そのため隣松寺では内陣の奥行が浅くなったが，随念寺では奥行を深くしたため，外陣をさらに1間深くして，内陣が外陣の方へ1間飛び出すこととなった。また内陣まわりや脇の間と仏壇前の間の結界とその上の建具の入れ方がやゝ異なり，隣松寺の内陣まわりの結界框は床に接し，随念寺ではすべて床より上り，床との間には羽目板が入るが，内陣正面中央間では柱間を広くとり，結界も建具もなく開放である。また隣松寺では脇の間と仏壇前の間の境の結界上は開放であるが，随念寺では結界上に建具が入る可能性が強い。

以上平面上の特色を中世以来の浄土宗本堂と比較してみると，浄土系の時宗本堂として広島県尾道の西郷寺本堂(文和2年，1353，棟札による　図5）が最も古く，外陣同様脇陣の巾を2間とっていることが近世の浄土宗本堂に通じる点で，背面に別室を設けるのである。

しかし，同じ時宗で島根県益田の万福寺（図6，応安7—1374棟札による）では間取は西郷寺本堂に似るが，内陣をめぐって結界が取付き，やはり背面両脇に別室がつく。尚両堂共斗栱も舟肘木を用い内陣まわりや礼堂以外は邸宅風に極めて簡素に扱われる。大分の善光寺本堂は妻入の奥深い堂で前面に外陣をとり，脇陣の幅は1間に止まる

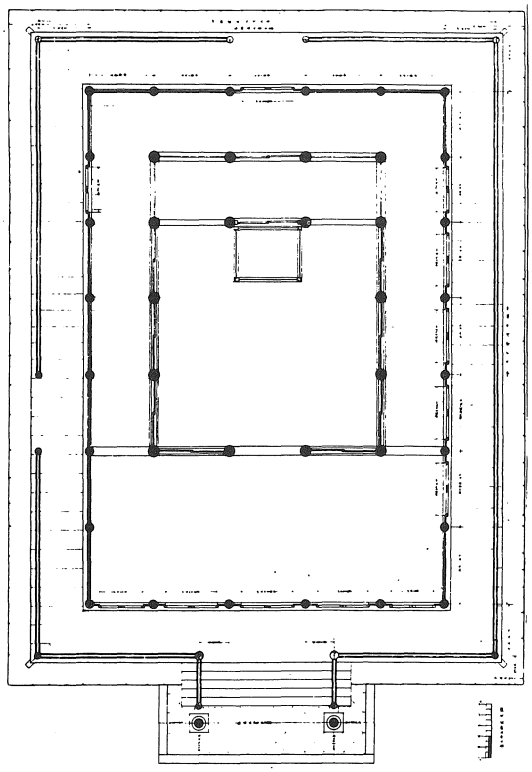

図7　善光寺本堂平面図

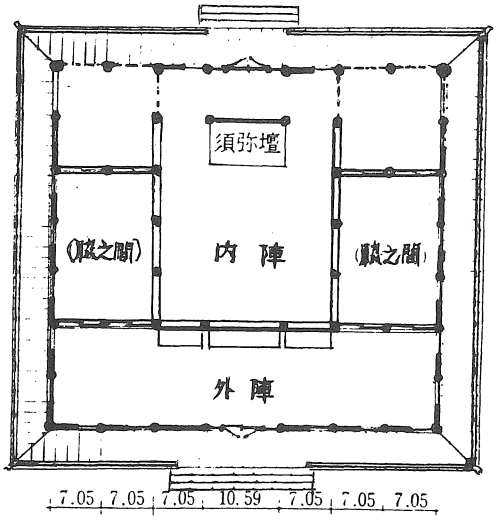

図8　知恩院勢至堂復原平面図

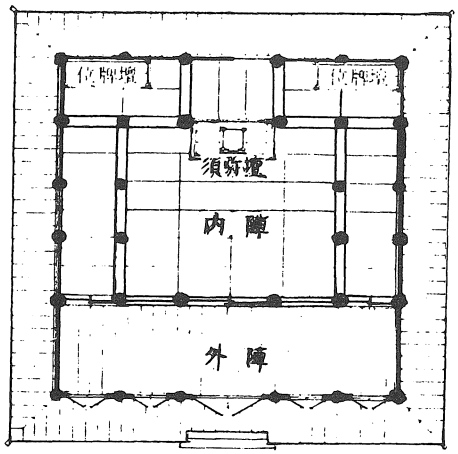

図9　大恩寺念佛堂平面図

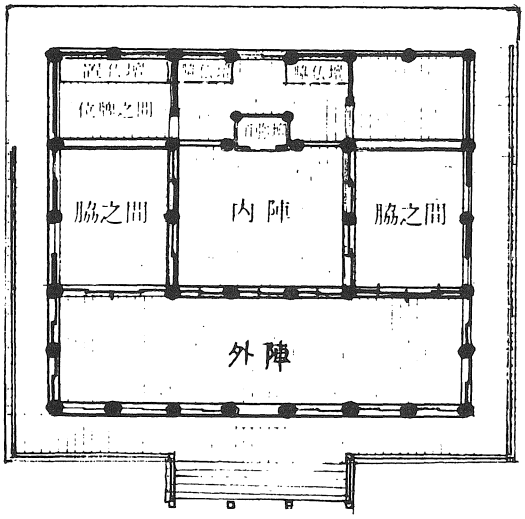

図10　当間寺奥院本堂復原平面図

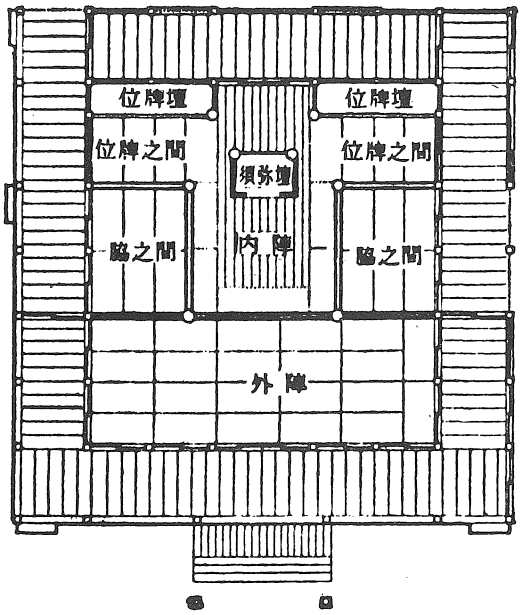

図11　崇徳寺本堂復原平面図

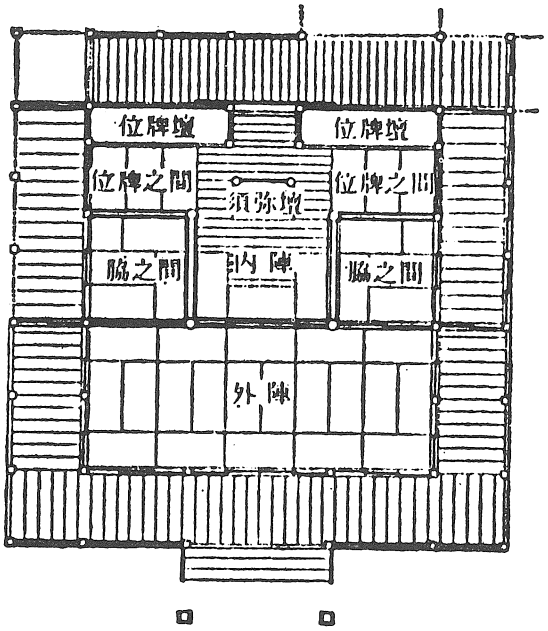

図12　金胎寺本堂復原平面図

が(図7)，内陣が奥深く，結界で囲うと共に格子戸が入る。もと知恩院の祖師堂で，本堂でもあった勢至堂の間取も先の時宗のものに似るが，内陣が奥深く背面に達し，背面の両脇間はその左右につく他，内陣正側3面と背面両脇の前面に結界がめぐり，外陣と脇の間境とそれらの結界上には建具が入った(図8)。

次に三河の大恩寺念佛堂は脇の間が挟く，外陣と内陣の間には結界が入り，脇の間と外陣の間とも格子戸を入れて仕切り，背面には左右に位牌の間をとっている。

以上の間には，近世の浄土宗本堂と共通する点が各所に見出されるが，近世の平面形態のほゞ定まってくる頃の例として慶長9年（1604）の大修理後の当麻寺奥院本堂を見ると，外陣が奥行2間にとられ，脇の間の巾も2間であるが，内陣は奥深くとられ，背面両脇には位牌の間が配され，内陣の正側面から位牌の間の前にかけて凸字形に結界が連なり，建具は外陣と内陣及び脇の間境と内陣と脇の間境に入り，位牌間の前は開放である(図10)。この平面は隣松寺本堂と通ずるところが多いが，これに準ずる例はかなり数えられる。しかし，外陣と内陣や脇の間の間の建具はかなり存続するのに対し，内陣と脇の間脇の間と位牌の間の境は結界を通ずるのみとなるものが多い。

そしてやがては江戸中期以後ともなると，建具がとれ結界のみ残ることになり，遂には結界もとれたものも出現する。尚，江戸初期のものには，外陣と脇の間にも，両脇とも或いは片脇のみ結界が通されて建具がおかれるものも残存する。前者の例は奈良の慶長8年（1603）崇徳寺本堂（図11）後者の例には奈良の阿弥陀寺本堂，金胎寺本堂（図12）等がある。

何れにしても脇の間の奥端におかれる仏壇（或いは位牌壇）の前の間は，元来結界の中にあって，内陣に通じる場所であり，初期の例では，内陣や位牌前の間，脇の間が閉鎖的に扱われたものが一般的で，此処にあげた三河の二つの本堂は江戸初期の特色を持つものとすることができる。それにしても外陣を広くとり　しかも広縁と脇の間との間仕切も用いず，広縁も外陣と一体として扱っている点は注意を要し，初期の段階でそのような取扱いを受けた乏しい例に数えられるであろう。

尚，詳細に立ち入れば，隣松寺本堂内陣まわりのように結界框を床に接しておく例とか，随念寺本堂のように内陣正面中央間を開放した例も他に余り見ない。又，落縁を用いていなかった例も余り多く見ないと言える。

付記　第5，6，8，10，11，12図の復原平面図は桜井敏雄氏の復原による。